
ななつ.....

ことぶきはじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ななつ……

【Nコード】

N3257Z

【作者名】

ことぶきはじめ

【あらすじ】

君島静奈が語る、第壹話目の話

メール 第壹話

ななつ……

メール

第一話

作：ことぶきはじめ

「うちの学校から送られてきたメール。これ絶対に開いたら駄目なんだって」

「えー、なんでえ？」

「死んだ生徒からのメッセージなんだって」

「バツかしいい」

「その生徒が死んだ時間が19：25で、その時間のメールだけは絶対に見たら駄目なの」

「何で死んだ時間が分かるの？」

「そりゃあ、警察が調べるから分かるでしょ」

「アホくさ……」

「……だよねえ」

その日も両親は遅かった。

神田実かんだみのるは自分の部屋の時計を見る。棚の上に置かれたデジタル時計の数字は23:52だった。

すでに日付も変わろうという時刻なのに、両親はまだ帰ってきていない。

それは今に始まった事ではないし、両親からの束縛を何よりも嫌う年頃の少年にとって、より快適な環境であった。

実はそのささやかな時間を、存分に楽しんでいる。多少の寂しさを紛らわせながら。

学校から帰ってきてても、家の中から木霊す声は全くなく、自分の声が不気味に響き渡る。生活音は全くない。家の中に人もいない。

誰かに構って欲しいと思うこともあるが、それは当然のこととなりつつあった。

そのような理由で実は無言で黙々と、自分で自分の世話をすることがなかった。洗濯、掃除、食事の準備。学校の勉強以外でも、実はやることが沢山ある。

当初はそれらが多少煩わしくもあったが、今では日常の一部となってしまうている。

いくら慣れたとはいえ、それらの雑務から解放されれば、夜の帳の落ちた時間になるのも仕方のないことであった。

そしてその僅かな自分の時間を、実はパソコンの中で楽しむことにしていた。

パソコン本体の電源を入れ、画面が立ち上がってくるのを待つ。
このパソコンは一年ほど前、たまに早く帰ってきた両親が、実の
暇つぶしにと買い与えたものだった。

ノート型のパソコンで、買った当時の値段は10万ぐらいだった
ような気がする。

かまってもやれない両親の贖罪なのだろうか。どうでもいいことに
金をつぎ込むとは思いつつも、拒否するなどという愚かなことはし
なかった。

画面が立ち上がると、とりあえずネットに繋ぎ、まずは自分宛の
メールをチェックする。

サイト運営などをしているわけではないので、メールチェックな
どは時々しかしないが、それでも何か変わったものが送られてくる
可能性はある。

そして本日送られてきたメールが6通ほどあったが、ほとんどが
広告などのメールであった。

最後のメールを削除しようとして、マウスを動かす指がピタリと
止まる。差出人を見れば学校からである。件名には何も書かれてい
なかった。

怪訝に感じながらも一瞬、そのメールを読まずにそのまま削除し
てしまおうかと思う。けれどすぐに思いとどまり、内容を確認した。

わたしを探してください。

とだけ書かれたいた。

実は日付を確認する。日付は本日であった。次いで時間を確認す
る。時間は19:25。

不気味さが一瞬、実の全身を駆け抜けていったが、それはすぐに
不快感へと変わっていった。

「クラスの奴の悪戯か？」

不快感からか、ついついそんな独り言が口から零れる。

暇なことをする奴もいたものだ。こんな悪戯をしそうなのは……、
いくつかクラスメートの顔が実の頭を過っていった。

椅子の背凭れに体重をあずけ、上半身を後方へと逸らしていく。

なんとなくサイトを一覽する気分ではなくなった。

「……寝るか」

結局はクラスの誰かの悪戯だろう。なんとなく気が削がれたような気がして腹立たしい。明日学校に行った時にでも問い質せばいい。

上体を逸らし、椅子に座ったまま両手を天井に向かって突き上げ大きく伸びをして、自分の中に発生した靄を外へと追いやる。

それからフラフラと立ち上がり、部屋の電気を消す。ベッドへと潜り込んでふわあと大きく欠伸をすると、そのまま夢の世界へと旅立っていった。

翌朝。いつ帰ってきたのか、そしていつ出かけたのか分からないが、とにかく両親はすでに家にはいなかった。

それを寂しいと思うことはなくなったが、やはり少しぐらい顔を合わせてもいいような気がする。

簡単な朝食を口に放り込み、朝のテレビを眺めながら咀嚼する。それから身だしなみを整え、家を出た。

通学路には燦々と朝の太陽が降り注いでいる。その陽の光を浴びながら、実は学校へと続く道を歩いていく。次第に生徒の姿も多くなっていく。

賑やかになる通学路を傍目に見ながら、昨夜のメールのことを考える。

あれは一体、クラスの誰の仕業だろうか？ と……。

「よお！」

いきなり声を掛けられた。相手の右腕が実の首を軽く締め上げる。軽く咳き込みながら、そんな事をするいつもの相手を見返した。

「おはよう、誠」

田所誠は、クルリと相手の正面へ回ると、おどけた風に敬礼した。

「おはよっす！」

手ぶらのまま、誠はフラフラと実の横を歩きだした。実はそんな誠を横目に見つつ、昨日のことを尋ねる。

「昨日のメール。お前だろ？」

「はあ、メール？ なんのこっちゃ？」

惚けているのだろうか？

一瞬そんな疑念が実の頭を過るが、誠は嘘を突き通せるほどポーカーフェイスが巧いわけではない。

こいつじゃないのか。そういつた悪戯をやりそうな人物であったが、その彼が違うというのなら違うのだろう。

長年の付き合いからそれぐらいのことは分かる。では他の奴らか？ 漠然とそんな事を考えながら、先を歩く誠の背中を眺める。

長細い誠の顔が、僅かに後ろを振り向いた。

「早く行こうぜ」

フラフラと先に行く誠に声を掛けられ、実はゆっくりと歩きだした。

学校に着き教室へ入る。自分の席に着き、うつ伏せになった。

昨日のメールの些細な疑惑が小さな棘となり、実の心の中に深く突き刺さる。

それが気になり、他者の雑音を遮断して、うつ伏せのまま自分の考えを纏めようとする。

送られてきたアドレスはこの学校からだった。時間は19:25。誰かが学校に侵入し、悪戯したのではないだろうか。

だとしたら何の目的で？ しかも『見つけてください』ってどういうことだ？

「……そりゃ実。幽霊からのメールだよ」

突然声を掛けられたことにビククリして見上げると、そこには誠が居た。相変わらずヘラヘラとにやついている。今はそれがどうも癪に障る。

やっぱりこいつが犯人か？

「へへへ、怖い顔すんなって。それに今、声に出てたぜ」

知らず知らずのうちに声が出たのか。恥ずかしさを隠すため、誤魔化すようにして頭を掻いた。誠に対しては曖昧な表情をみせる。誠は相変わらず、ヘラヘラと笑っている。どうもこの締りのない顔が昔から好きではないが、それでも一緒にいるのはなぜだろうか。

「まっ、そのメールだけどき、何かの間違いつてこともあるさ。気にすんなって」

誠の言うとおり、やはり考え過ぎだろうか。何となく心に引っ掛かるものを感じつつ、実はメールの件を忘れることにした。

結局、誰かに問い質すこともせず、その日の授業は過ぎていった。

朝からの快晴は夕方過ぎには崩れ始め、実が家に着くころには大粒の雨が降り始めていた。

家に入ると鞆を放り投げ、急いで洗濯物を取り込み、乾燥機にかける。その間に濡れて冷えた体を温めるため、シャワーを浴びた。シャワーから流れ出る温水に身を委ねつつ、ふと頭の隅に残っていたメールの件を思い出す。

学校では朝以来思い出すことはなかったが、家に帰って人心地着けば、妙にそのことが気になった。

「気にするな」と誠は言っていたが、シャワーを浴びて心に余裕ができたことにより、メールのことが蒸し返される。

あの文面には一体、どういった意味があるのだろうか。『私を見つけてください』と書かれていたが、その“私”とはいったい誰のことなのだろうか。

シャワー口から降り注ぐ水滴が床のタイルに叩きつけられ、風呂場に響き渡る。

物思いに耽りながらも全身を洗い終え蛇口を止め、風呂場から出た。足マットで水気を切り、近くに置いてあるタオルで身体に着いた水滴を拭いとっていった。

手にしたタオルを頭から被る。その奥から「ふう」とため息が漏れ聞こえてきた。

いつもより早い時間に自分のパソコンの前にいるのは稀であるが、それは日常の家事の手を抜いたからという理由がある。

手を抜いたのは、やはりあのメールが気になったからである。今日もパソコンを立ち上げ、メールをチェックした。

一件のメールが受信ボックスに入っている。宛名はやはり実の通う学校からであった。

やはりという思いと不気味さを内包しつつ、実は僅かに震える指でマウスをクリックした。

ディスプレイに、届いたメールの内容が表示される。

私を探してください。私は学校にいます。

短い文章ではあるが、昨日よりは幾分内容が踏み込んだものになっている。

ゴクリ

実は生唾を飲み込む。カラカラと干乾びていく喉がやけに熱く感じられる。

実はこの不気味なメールの内容に、少し興味を持ち始めていた。この文章に対し、返信すればどうなるのだろうか？

好奇心が実を支配していく。カーソルがグルグルと画面を所狭しとまわり始めた。

実の口から、絞り出すような、どこか呟いたような声が漏れる。

「返信……、してみようかな……」

これは冗談だ。何かの冗談に決まっている。絶対に何も起こらない。

大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫……。

心の中でそう念じながら、恐々と文章を打ち始める。

もしかしたら……、いやそんなことは、でも……。

あなたは誰ですか？

実はたったそれだけを書くのに、たつぷりと5分以上をかけた。戸惑いと決意が心の中でシーソーのように揺れ動く。キーボードを叩く指が僅かに震え、目的の文字を正確に打ち抜くことも出来ない。

やっと文章を打ったとしても、それを送信するためにEnterキーを押すのが躊躇われる。

それらは全て、この後に起こる事象が予想できないからである。

これらが全てただの悪戯ならまだいい。

けれどそうでなかったら？

何かの悪意が込められていたとしたら？

恐怖は人間を魅了する。魅了されれば、その先にある真実を知ろうと思う。

その真実を知るためには対価が求められる。その対価は自分に払いきれるものだろうか？

「いや。やっぱりただの悪戯さ……」

自分に言い聞かせるその言葉は、どこか弱々しい。緊張からか僅かに息も荒い。

実はEnterキーを、己の臆病さを振り切るように叩き押した。何事もなくメールは送信される。

クルリと周囲を見渡す。なんの変化もない。

当然だ。メールを送っただけで変化などあるわけがない。何かがあるとしても、そんなのは映画の中だけの話に決まっている。

自然と笑いがこみあげてきた。ゲラゲラと笑う声が部屋中に響く。

たったこれだけの文章を書くのに、えらく気疲れしたような気がする。

何事もないと分かると、自分のバカさ加減に呆れ返ってしまう。メールを送信するとき真剣に悩んでいたが、なぜそれほどまでに悩む必要があったのか。

その緊張が途切れたのか、それとも何かが起こるといふ期待に対し、あまりにもあっけなくメールが送信されたことに対する反動からか、実の笑はしばらく途絶えることはなかった。

ようやく自己の笑いの奔流から解放された実は、椅子の背凭れに体重をあずけて、大きく伸びをした。

ソワリ

その時、実の背後を何かを通る……、いや、通ったような気がした。

項の辺りを何かがぬるりと触る。

背中に悪寒が走った。

素早く後ろを振り向くが、そこにはいつもの部屋の扉があるだけで何かが存在するわけではなかった。

いつも見慣れた自分の部屋が、どこか見知らぬ部屋のように感じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3257z/>

ななつ.....

2011年12月11日09時45分発行